歴史地理学　63－1（299）1-5　2021. 1

シンポジウム趣旨説明

「地理教育と歴史地理」の課題

藤　田　裕　嗣

地理学界を賑わしている昨今の話題の一つとして，2018年3月に改訂された高等学校学習指導要領が2022年度から年次進行で実施され，地理歴史科の必履修科目として，「歴史総合」とともに「地理総合」各2単位が新しく登場する点がある。2019-20年度歴史地理学会大会では主にこの点を受け，「地理教育と歴史地理」と題する「共同課題」が掲げられた。もう一人の椿真智子教授（東京学芸大学）とともに，学会からオーガナイザーの大役を委嘱され，微力ながら，お引き受けすることにした。共同課題の「趣旨説明」の文章は，2年目の大会で発表者をお願いする際に重要となり，実際にまとめる一員となった藤田は，学会本部とも連絡を密にしながら，次の形で落ち着いた。歴史地理学の観点から設定されるべき課題についても，きちんと論及した積りであり，ここに全文を引用すれば，以下の通りである。

グローバル化の進展や新たな知識基盤社会への対応にむけ，文部科学省は2017年3月に幼稚園および小中学校の学習指導要領，2018年3月には高校学習指導要領の改正を公示した。後者は，2022年度からスタートされる予定である。なかでも高校地歴科では，選択科目・地理A・Bにかわる必修科目「地理総合」と発展的学習としての選択科目「地理探究」が新たに開設されることとなった。学校現場では地理を専門とする教員の減少が指摘されてきたが，今般の必修化により，地理教員の需要と地理再教育のニーズが急激に高まりつつある。「地理総合」では，地図と地理情報システムの活用，国際理解と国際協力，防災と持続可能な社会の構築の3つが重要項目と位置づけられたが，それらに関わる歴史地理学の研究成果は多く，同時にそれらの課題「探究」に歴史地理的視点を欠くことはできない。また小・中学校の社会および高校地歴・公民のいずれにおいても多面的・多角的見方や総合的かつ比較的視点が一層強調されたのに加え，歴史学習における地理的条件や地理学習における歴史的背景など，地歴の融合もこれまで以上に求められている。こうした地理教育をめぐる転換期に，歴史地理学会として，研究・学会活動と学校教育との連携や課題共有をはかり，議論を深化させることは大きな意味をもつと考えられる。2022年度のスタートに向けて，今こそ本格的に準備を始める必要があろう。学会員のみならず，社会科や地理・歴史教育に携わる多くの参加者の交流の場となることを期待したい。

このような趣旨の下，初年度の2019年は，立命館アジア太平洋大学での大会がほぼ予定通り開催された[1)]。その成果の上に立ち，2年目の2020年5月には兵庫地理学協会との共催で神戸大学を会場にシンポジウムに向けた準備が進められた。具体的には，2020年5月22-24日に兵庫地理学協会と共催の形で大会が予定されたが，実際には「新型コロナ禍」の影響が不可避になり，予定通りの開催自

体，無理だ，と判断された。

今回，シンポジウムの「趣旨説明」をするに当たり，2020年5月については形式的にはシンポジウム報告の会誌掲載により成立をみるものの，実際には現段階で年度内の3月に例会の形で，自己剽窃等に十分留意したうえで何とか開催するべく，準備が着々と進められている点にまず触れておきたい。ここで機関誌の『歴史地理学』誌の63巻1号でシンポジウムの特集号を組む訳で，記録を残す意味もあるし，オーガナイザーの一人を務めた藤田としては，全体像と各報告の位置づけと意図について説明して，その責任を果たす方針とする。

すなわち，大会自体が中止，という，歴史地理学会の歴史でも初めての措置になったものの，現時点で最大限の努力をして，フォローが積み重ねられている。Web形式を使う便法になるが，この3月に歴史地理学会と兵庫地理学協会とが例会を共催する方向性で話が進められている。この点について未決定の情報は，流すべきではなく，最終的に決定された段階で会員に周知することをお約束したい。不十分な情報は，敢えて割愛することをご容赦願う次第である。

以下は，あくまでも5月段階で予定されていた形を主体にして記述する。とは言え，この趣旨説明を脱稿する段階では，藤田の原稿の完成は間に合わなかった。現段階で，3月の例会に向け，さらに充実できるのでは，と考えた背景もある。そして，他にも今回，原稿を寄せていただけていない登壇予定者もいる訳で，3月を期して，ここではお名前は敢えて明記しない原則としたい。かつての予告には掲げてあり，そちらも参照していただければ，幸いである。

5月段階で予定された大会全体について，まずは初日に巡検を神戸市内で設定し，23-24日の両日に神戸大学大学院人文学研究科を会場にして，特に最終日の2日目にシンポジウムが設定された。

その中で，公開講演会は，共同課題との関係も勘案しつつ，藤田から依頼して，ご快諾が得られた。

1）小野田一幸（神戸市立博物館）「館蔵資料を活用した授業の展開―神戸市立博物館の取り組み―」

2）a「日本中世史学から見た地理学との連携―高校地歴科，2年後の必履修科目スタートを踏まえて―」

上記の通り，「日本中世史学」がご専門であるa氏に関して掲げたテーマは，あくまで藤田が依頼した際の仮題に過ぎない。これに対して，今回のシンポジウム特集号に載せるための報告執筆については，他の課題との関係で，お断りになられたのは残念ではあるが，依頼した際の文面（実際にはメール）も生かしながら，お願いした主旨を説明すれば，以下のようになる。

神戸大学附属中等教育学校で2016年度後期から2019年度まで校長をお引き受けした藤田は，その立場から「地理総合」の研究開発学校の任に当たったのであり，「歴史総合」も含め，新指導要領のスタートまで2年を残すだけのこの時点で，「地理総合」についても，きちんと準備していきたい，と切に願っている。今の高校現場の実態としては，地理が専門で学ばれた教員は少ない事情も心得ている訳で，「地理総合」については，歴史が専門の高校教諭にも手伝ってもらう必要がある，と認識している。歴史がご専門の先生でも無理なく指導できる「地理総合」については，歴史と地理の両方を考え続けてきた歴史地理学が重要なキーを握る，と覚悟している。我々，地理学者こそが考えるべき訳である。中でもその趣旨から，歴史地理学会がこのシンポジウムを企画しているのだ，と説明して，講演はお引き受けいただいていた。

なお，神戸市立博物館の小野田一幸氏による「講演」の要旨については，従来のスタイ

ルを踏襲して掲げているが，第一部の3）「2年後のスタートに向けた課題と展望―『地理総合』周辺との連関性，地域連携と大学入試」でご登壇いただく予定にしていた和歌山市立博物館の額田氏の発表と対比される。併せ参照されたい。

そして，本番のシンポジウムでは，三部構成とし，第一部「2022年度『地理総合』をめぐって」に続く第二部は，「その上で，改めて共同課題『地理教育と歴史地理』の文脈をオーガナイザーから問い直す」とした。そして，それらを踏まえ，最後に第三部として，1時間弱の討論時間を設定した。

第一部から登壇予定順に，オーガナイザーとして依頼した主旨とともに，今回，展開していただいた報告の内容を簡単に紹介することで責めを果たしたい。

1）は，2022年度スタートの「地理総合」に関する内容紹介と共通理解を得るよう，意図した。まず，b氏には「中学校社会科地理的分野と高等学校『地理総合』」との関係についてメスを入れていただくよう，お願いしたところ，実際には「中学校社会科地理的分野から高等学校地理歴史科『地理総合』への接続－ディシプリンとしての地理の基礎を学ぶ中学校社会科地理的分野のあり方とは－」と，さらに課題を明確化したタイトルを予定いただいている。「地理総合」との関係で「中学校社会科地理的分野」を位置づける方向性であり，3月の例会では後述の報告とともに，大学教育で「地理総合」担当の高校教諭を育てる上でも，絶えず念頭に置くべき論点と言えよう。

そして，「2年後のスタートに向けた課題と展望」と題した形で，高校と大学教員にお願いすることにした。

まずは，「地理学を基盤とした教員養成から」として，前提となる研究開発学校を長年務めた神戸大学附属中等教育学校の現役教員に「『地理総合』の開発と実践―研究開発学校として―」との題目で依頼したが，今年度は，「新型コロナ禍」の影響で，研究開発学校の授業が予定通り進まず，本校における「実践」報告すらできなかった経緯を踏まえ，執筆辞退の申し出があり，オーガナイザーとしてやむを得ないと判断した。

もう一方では，大学での教員養成に焦点を合わせ，国立大学と私立大学の各1名，お二方にご発表をお願いした。このうち私立大学の教員c氏には「社会科教員養成における歴史地理的技能の涵養―『身近な地域』の教材作成を核とした実践―」とのタイトルをいただいたが，実際には「新型コロナ禍」に伴う大学での混乱も大きく，残念ながら執筆が間に合わなかった。3月例会に期したい。

一方で，国立大学の滋賀大学教育学部について，安藤哲郎准教授に「教員養成課程での対象拡大型の地理教育―実践を通じた歴史地理学への提言―」と題してお願いした。巡検も組み込んだ形で，実践的な高校教員の養成についての貴重なレポートである。他の教育系の大学でも参照できる内容となっている。

次に，「小中の学習指導要領および教員養成との関連性（歴史学との連関性と実践報告を含む）」という形で，神戸大学のお二人にお願いした。

神戸大学附属小学校の古谷亨仁教諭には「新学習指導要領における小学校『地理的環境と人々の生活』分野の枠組みと実践」の形でお願いし，小学生に対する実践に基づく貴重なレポートが得られた。今回の授業を本校で受けた児童も，数年後には高校に進学し，全員が「地理総合」を受講することになる訳である。

さらに，神戸大学大学院人間発達環境学研究科の吉永　潤教授には，「社会科教育論から見た『地歴科』における必修科目への提案」という仮題でご快諾いただいた。本号にお寄せいただいた報告ではさらに論点を詰められ，「個別事象の二項関係で学ばせる社会

科授業の提案―『個別事象対一般概念』図式の優越性を抜け出るために―」のタイトルで頂戴できた。社会科教育の中でも，特に歴史教育に重きが置かれており，そもそも本誌では画期的で，特筆すべきと考えている。2022年度の高校地理歴史科の必履修科目が「歴史総合」と「地理総合」の二本立てに分化される点で，歴史学と地理学との連動が不可欠である，とオーガナイザーの筆者は認識しており，その面でも本誌に寄せていただいたことの効果を期待している次第である。

さらに，「大学時代に歴史学を基盤とした地歴科教員でも無理のない『地理総合』への模索」と題して，中部大学の山元貴継准教授に「アニメ聖地巡礼を地理教育に活かす」という形で登壇をお願いし，ご快諾いただいた。アニメ聖地巡礼に関する地理学論文も増えてきたが，それを「地理教育に活かす」観点は新しい。学習指導要領が改訂され，2022年度にスタートされるキーワードが，「主体的・対話的で深い学び」なのであり，高校生対象の「地理総合」では，取り入れ易いのではないだろうか。アニメ聖地巡礼が活かされた「地理総合」を通じて，高校生の「地理」への関心が，高まることを期待したい。さらに，アニメを通じて日本語や日本文化に関心を持つ外国人にも広がる契機になるかも知れない。そのようなヒントも満載である。

第一部の最後に，「2年後のスタートに向けた課題と展望―『地理総合』周辺との連関性，地域連携と大学入試」と題して，和歌山市立博物館学芸員の額田雅裕氏に和歌山市における地域連携の実践報告をお願いし，一方で，大学入試などに焦点を当て，兵庫県立神戸高等学校の宗　敦夫教諭に「大学入試センター試験を含む大学入試と地理歴史科」をお願いし，いずれもご快諾をいただき，玉稿も頂戴できた。

まず額田報告「博物館の地域連携―和歌山市立博物館の場合―」では，講演いただいた神戸市立博物館の場合に比べ，より一般的事例と位置付けられる。高校「地理総合」で博物館との具体的な連携を模索する際に，参考にしていただけるだろう。なお，講演要旨は，本号の末尾に載せる伝統的スタイルに合わせている。

一方，宗教論は，実際にお寄せいただいた玉稿のタイトルでは「地理総合の授業をどう展開するか―歴史的観点を導入して―」とされ，より先鋭化された。最後に「日本史や世界史が専門の教師でも，長期統計を使って，歴史的観点を入れると教えやすくなる。歴史的観点を持って地理総合に取り組むことは，持続可能な開発目標を考える上でも有益だし，未来を見通せるような教材づくりにも必要である」と指摘されている。長年，大学入試センター試験対策も取り入れて指導された経験に基づいたご見解であり，「日本史や世界史が専門の教師」の胸に響くことを期待している。

第二部は，オーガナイザーの二人が登壇する形にして「その上で，改めて共同課題『地理教育と歴史地理』の文脈をオーガナイザーから問い直す」と題し，まずd氏に「地理教育の立場から見た『地理総合』と『地理探究』」をお願いし，歴史地理学の立場からは，藤田が「校長を経験した歴史地理学者による『現代風土記』の提案」を提示する形とした。後者，藤田は時間不足もあって，今回，成文化には至らなかったが，「現代風土記」の構想については，口頭報告に過ぎないとは言え，既に何度か表明する機会があり[2)]，それを元に3月の例会で膨らませる予定である[3)]。

最後に，第三部として，「討論」を50分程度予定していた。これ自体は，多くの方のご参加とご協力が不可欠であり，3月の例会の機会に委ねたい。

神戸大での歴史地理学会大会開催は，実は，2009年にも経験がある。その実績と反省をもとに，今回は，巡検と講演をも含めて，

慎重に準備した積りなのだが，「新型コロナ禍」で，中止の止む無しになったのは，痛恨の極みである。次の機会として，Webを用いての実施となる予定の2021年3月例会で，高校地理歴史科教育における必履修科目，「地理総合」の登場，という1年後の新しい状況を機縁に，小学校から大学までの地理教育のさらなる充実，という大きな課題に向けて，進展を図りたい。「地理教育と歴史地理」という共同課題のオーガナイザーの一人として，現時点から会員諸氏のご協力を切にお願いする次第である。

（神戸大学）

〔注〕

1）藤田は口頭発表し，その内容について論文を寄せた。藤田裕嗣「神戸大学における講義の受講生を通じてみた『地理総合』の課題と問題点―再編された『全学共通授業科目』の2018年度担当講義を中心に―」歴史地理学62-1，2020，19-27頁。

2）藤田裕嗣「兵庫県版『現代風土記』の試み―2022年度スタート『地理総合』に向けた歴史地理学者からの提言―」兵庫地理64，2019，118-119頁（兵庫地理学協会2018年12月16日の報告要旨）。同「中等教育で『地理』と『歴史』との間を埋める試み―3年後の『地理総合』スタートに向けて，奈良地理学会への提案―」奈良地理学会報復刊41，5-6頁（奈良地理学会2019年度夏季例会7月20日の報告要旨）。

3）筆者の関心が，高大連携事業から災害復興プロジェクトに広がった経緯については，次の拙稿を参照されたい。藤田裕嗣「地籍図を用いた景観復原と災害復興」史潮新76，2014，19-27頁。